

岐阜市城田寺におけるケリ分布の季節変化

兼島香織

研究目的 チドリ目チドリ科に属するケリ (*Vanellus cinereus*) は、水田地帯を中心に生息する鳥類であり、近年分布の拡大が報告されている。しかし、ケリの生態は未解明な部分が多く、生息域の拡大要因はわかっていない。そこで、本研究では、ケリの分布が拡大している要因を検討する基礎研究として、繁殖期だけでなく非繁殖期を含めたケリの分布状況を調査し、水田地帯におけるケリの生息状況を考察した。

調査地および調査方法 調査地は岐阜市城田寺の農耕地(約 92ha)である。調査地の土地利用状況は、水田(57%)、休耕地(13%)、畑(12%)、果樹園(16%)となっている。水田には5月中旬から田植えのために水が入り、9月上旬から稲刈りが行われる。調査は、一定ルートを車で時速 20km 未満で走行して行った。ケリを発見したら車を止め、車内から双眼鏡(8倍)でケリを観察し、個体の位置と行動を記録した。調査は2008年3月から同年11月まで週1回、計38回行った。

結果および考察 ケリの分布には季節変化がみられ、その傾向は4つに区分することができた。耕作地全体にわたる分布(3月~5月上旬) 稲が作付けされた水田に集中した分布(5月中旬~7月中旬) 休耕地に集中した分布(7月下旬~8月) 稲が刈り取られた水田に集中した分布(9月~11月)である。この時期の水田は田植えが行われて間がなく、稲の草丈が低い。この時期の水田に分布が集中した要因として、入水により土壌が膨軟となり、餌となる土壌生物の捕獲が容易になったことが挙げられる。さらに、視覚に頼った採食方法を行うケリにとって、草丈が低い水田は採食に適した環境であったと考える。しかし、この時期の水田は、中干しのために落水され、水田土壌の表面は乾燥し固くなり、土壌生物の捕獲が困難となる。また、稲が成長し草丈が高くなった水田は、視覚的に狭い空間となるため、採食が困難な環境になったと推測される。このため、比較的開けた空間である休耕地の方が、採食に適した環境となり、水田から休耕地へと分布が移動したと考える。そして、この時期の水田は稲刈りが行われ、刈り取りが終了した水田にケリが集中して分布した。分布が再び水田へと移動した要因として、稲が刈り取られたことにより、水田が視覚的に開けた場所となり、採食に適した環境になったと考える。また、この時期には抱卵や育雛するケリの姿も確認でき、つがい単独での分布を示し、繁殖期を終えた。この時期には群れでの分布を示した。発見した営巣場所はいずれも前作に稲が作付けされた水田であり、巣の材料となる稲藁が豊富に存在することが理由として考えられる。さらに、水田は代掻きまで農作業によるかく乱を受けないため、繁殖に適していたと推測される。これらの結果より、水田はケリの繁殖場所および採食場所の両方として重要であり、水田が採食場所に適していない時期は休耕地を利用していることがわかった。よって、ケリの生息には水田だけでなく、休耕地の存在が重要であり、減反で休耕地の面積が拡大している状況はケリの分布が拡大している要因の一つとして考えられる。